

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：12102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H06653

研究課題名(和文)近現代日本語における助数詞の新生に関する語彙論的研究

研究課題名(英文)A lexical study on the formation of new classifiers in modern Japanese

研究代表者

田中 佑 (TANAKA, Yu)

筑波大学・人文社会系・特任研究員

研究者番号：30779674

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近現代日本語における助数詞の新生に関する課題である変化要因の類型化と変化過程の一般化について、「-ケース」「-パターン」「-タイプ」「-路線」の4語の考察から、以下の点を明らかにした。
変化要因は助数詞へと変化する名詞が一般的意味を持つのか具体的な意味を持つのかによって類型化できる。
変化は形式間の類推による数量詞の統語的分布の拡張によって起こり、一定の経路をたどる。

研究成果の概要(英文)：This research discusses the issue of classification of change factors and the issue of generalization of change process in the formation of new classifiers in modern Japanese. Four words "-Keisu (Case)", "-Pataan (Pattern)", "-Taipu (Type)" and "-Rosen (Route)" were taken up. The results are as follows.
The change factors can be categorized on the basis of whether the meaning of a noun changing into a classifier is general or specific.
Changes occur as a result of extension of the syntactic distribution which is caused by the analogy between quantifier sentence structures. Also, the change follows a set path.

研究分野：日本語学

キーワード：助数詞 類別詞 言語変化 数量表現 共起名詞の指示対象 集合形成

1. 研究開始当初の背景

日本語で事物の数量を表現する場合、数詞の後ろに「助数詞」と呼ばれる要素を義務的に付加しなければならない。「1人」の「-人」、「2個」の「-個」、「3本」の「-本」などである。助数詞は数量を表現する際に、ヒトが自身を取り巻く世界をどのように捉えたかをことばに反映させる言語要素である。そのため、数を表現される事物の消失や変化、出現(世界の変化)によって、既存の助数詞が消失したり、新たな助数詞が生じたりする。

新たな助数詞は主に既存の名詞からの派生によって生じる。具体的には、「-試合」「-店舗」「-路線」「-編成」「-往復」「-世帯」「-種類」「-ケース」「-パターン」「-タイプ」などがそれに当たる。新たな助数詞の成立(以下、「助数詞の新生」という現象を踏み込んで論じる研究はながらく見られなかったが、近年、その全貌を明らかにするための基盤となり得る研究が徐々に蓄積されつつある。

しかし、変化・定着の過程の一般化および要因の類型化には未だ至っていないのが現状である。

2. 研究の目的

本研究では、近現代日本語における助数詞の語彙体系の変遷について、言語変化の観点から考察を行い、その変化要因の類型化、変化過程の一般化および言語変化に対する母語話者の意識的側面の解明を試みる。

本研究で扱う事例は以下の2つである。

(a)近代から現代にかけて起きた和語・漢語助数詞の新生

(b)現在起こり始めている外来語助数詞の新生

上記の2つの事例の分析を通して、それぞれの助数詞がいつ、なぜ、どのように成立し、定着していったのかを記述する。また、(b)については、新しい語や用法が母語話者にどのように受け入れられていくのかといった母語話者の意識的側面も明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、近現代日本語における助数詞の新生という現象における変化・定着の過程・要因および言語変化に対する母語話者の意識的側面について、次の2つの方法でアプローチする。

- ・コーパス検索と手作業による資料調査を併用した通時的調査

- ・アンケートによる母語話者の意識調査

前者に関しては個々の助数詞について次の5つを記述する。

〔言語内的側面〕

当該助数詞の成立時期

当該助数詞の意味

当該助数詞成立の要因

類義助数詞の用法変化

〔言語外的側面〕

共起名詞の指示対象の変化

従来の研究は を記述するのみであった。しかし、本研究では、それに加えて、語彙体系の変化()や言語外的側面()についても調査・分析を行う。また、助数詞に関する従来の研究では、多様な分野を収録している新聞が資料とされることが多かったが、本研究では、それに加えて専門誌の調査も行う。

後者については、母語話者の意識に関するアンケート調査を行い、調査協力者を若年層(～20代)、中年層(30代～40代)、高年層(50代～)に分け、新しい語や用法を母語話者がどのように受け入れているのか、和語・漢語と外来語の受容に位相差はあるのか、などを明らかにしていく。アンケートについては、コーパスや資料の調査で得られた用例を基に作成することで作業の効率化を図る。

4. 研究成果

本研究の課題は、近現代日本語における助数詞の新生における変化要因の類型化、変化過程の一般化および言語変化に対する母語話者の意識的側面の解明である。

研究計画に従って、上述の「(b)現在起こり始めている外来語助数詞の新生に関する調査」を行い、それに基づいて母語話者の言語変化に関する意識調査に用いるアンケートを作成する予定であったが、得られた用例数が当初想定していた数をはるかに下回ったため、言語変化に対する母語話者の意識的側面の解明は今後の課題とした。

よって、以下では、現代日本語における外来語名詞の助数詞への進出および近現代日本語における助数詞の新生における変化要因の類型化、変化過程の一般化に関する研究成果を報告する。

(1) 外来語名詞の助数詞への進出

助数詞は意味的に「単体類別詞(単体を数えるための類別詞)」「グループ類別詞(集団(グループ)を数えるための類別詞)」「計量詞(対象の数量を量り取る働きのみをする)」の3つに分類される(影山太郎他2011(「名詞の数え方と類別」影山太郎編『名詞の意味と構文』pp.10-35 大修館書店))。このうち、単体類別詞は他の2つの下位範疇に比べ、外来語の比率が高くなかった。しかし、近年、単体類別詞にも「-ケース」「-タイプ」「-パターン」「-プラン」といった外来語が見られるようになった。

助数詞は、「日本語には単体類別詞とグループ類別詞の両方があるが、英語には単体類別詞は存在せず、グループ類別詞が少数見られるだけ(影山太郎他2011(同上))」とされている。しかし、たとえば「-ケース」には原語である英語にも“*There were 16 cases of damage to cars in the area*”といった用法は存在する。以上を加味すると、上記のような外来語がどのような過程を経て助数

詞用法を派生させたのか、なぜ助数詞用法を獲得し得たのかが問題となる。

この点を明らかにするために、本研究では「-ケース」「-タイプ」「-パターン」の3語を対象に通時的調査を行い、成立時期の特定と派生の過程・定着の要因の解明を試みた。通時的調査に用いた資料は以下のとおりである。

- ・『明六雑誌コーパス』
- ・『国民之友コーパス』
- ・『近代女性雑誌コーパス』
- ・『太陽コーパス』
- ・『『国会会議録』パッケージ』
- ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』
(以上、国立国語研究所提供)
- ・『神戸大学デジタル版新聞記事文庫』
(神戸大学附属図書館提供)
- ・『聞蔵 ビジュアル』内「朝日新聞」
(朝日新聞社提供)

以上の資料がカバーする通時的範囲を下図に示す。

西暦	1868	1912	1926	1989	2016
和暦	M1	T1	S1	H1	H28
明六	-				
国民	-				
女性	—————				
太陽	—————				
神戸		—————			
国会			—————		
均衡				—————	
朝日				—————	

結果、「-ケース」「-タイプ」「-パターン」の3語について、いずれの語も2000年前後に助数詞用法を獲得したこと、3語すべてに名詞として輸入された時期と助数詞として使用されるようになる時期に大きな時間的ずれが確認されるため、原語からは名詞として輸入され、のちに日本語内で助数詞用法を派生させたというプロセスを辿った可能性が高いことが明らかとなった。

また、これらの語は「-ケース」に対する「-例」、「-タイプ」「-パターン」に対する「-種類」のように、既存の助数詞が存在する中で用法を確立させ、定着に向かっていくと捉えることができるが、この点については、意味的な相違のみならず、既存の助数詞にない用法(リスト用法)の存在や「?? 7種類 10車種 / 7タイプ 10車種」のような冗長な表現の回避による外来語助数詞の使用数の維持が関与していることがわかった。

(2) 変化要因の類型化

助数詞「-店」の成立について扱った田中佑(2015)「助数詞「-店」の成立の過程と定着の要因」*Ars Linguistica*.22, pp.81-106 日本中部言語学会)では、産業革命による職住分離の社会の形成が、職住一体であった居住・職業空間から〔住〕の側面を喪失させ、〔住〕の数を表現する「-戸」の用法縮小と、

〔職〕の数を表現するための助数詞「-店」の成立を誘発したことを示した。しかし、「-ケース」「-タイプ」「-パターン」のように数を表現される名詞の指示対象が幅広く、意味の一般性が高い語については、上述のような社会的要因による影響を受けるとは考え難い。

上述したように、外来語名詞の助数詞への進出は2000年前後に集中して起きている。外来語は20世紀後半を通じて徐々に言語使用領域内で広範囲・高頻度で用いられるようになり、20世紀末になってそれが顕在化したとされている(金愛蘭2011(「20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」『阪大日本語研究 別冊3』大阪大学大学院文学研究科日本語学講座))が、外来語名詞の単体類別詞への進出はこの外来語の基本語化の延長上で捉えられる。すなわち、外来語が基本語彙に定着し、日本語の基本語彙における外来語の比率が上昇していく中で、それまでは外来語を用いることに抵抗のあった領域においても外来語を使用することが許容されるようになり、外来語の基本語化が顕在化する20世紀末を境に、それまで外来語が進出し難い領域であった単体類別詞にも外来語が進出したのである。

以上から、「-店」のように具体的な指示対象を有する語が助数詞用法を獲得する場合は、言語主体を取り巻く社会やそこに存在する事物の在り方、つまり、共起名詞の指示対象の在り方の変化が影響するのに対し、「-ケース」「-タイプ」「-パターン」のような数を表現する対象が具体物に限られない一般性の高い意味を有する語の場合は、共起名詞の指示対象の在り方の変化には左右されず、語彙体系内の外来語比率の増加といった言語内的な環境の変化に影響を受けることが明らかとなった。

このような事実は、近現代日本語における助数詞の新生の変化要因は、助数詞へと変化する要素が一般的意味を有するのか、具体的意味を有するのかによって類型化できる可能性を示唆している。

(3) 変化過程の一般化

助数詞の新生は意味的な変化ではなく、数量詞構文間の形式的な類推によって生じ、以下のような一定の経路をたどることが明らかになった。

1. 名詞的単独用法(審議中の18路線は着工が延期された。)
- 2a. 被連体数量詞構文(東西線と南北線の2路線を認定した。)
- b. 同格数量詞構文(新街路30路線を開通する。)
- 3a. 連用数量詞構文(ケーブルカーを2路線残している。)
- b. 連体数量詞構文(12路線の航空路を開拓した。)

助数詞の新生は、従来の研究でも現象の存

在は指摘されていたが、その変化の過程については言及されることがなかった。そのような中で、変化過程の一端を明らかにできたことは日本語史研究、言語変化研究にとって重要な意義を持つと言える。しかし、その一方で、なぜこのような順序で拡張が起こるのかについては研究期間内に十分に明らかにすることができなかった。現在のところ、数量詞構文における、() 数量詞の指示 / 非指示、() 数量詞の機能、() 集合形成の在り方が関与している可能性が高いと考えているが、この中のどれか一つだけが変化に関与するのか、複数に関与するのか、さらに異なるファクターが存在するのか、など不明な点が多い。これについては、複数の事例を照らし合わせ、共通部分を抽出することが有効であると考えられるため、今後はさらに多くの助数詞について記述を進めて行く予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

田中佑、「路線」の意味変化と助数詞化、語彙研究、有、14号、2017年、pp.1-11

田中佑、外来語名詞「タイプ」の助数詞への進出、文藝言語研究、有、71巻、2017年、pp.183-201

https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=40649&item_no=1&page_id=13&block_id=83

田中佑、外来語名詞「パターン」の助数詞への進出、言語学論叢 オンライン版、有、9号、2016年、pp.1-14

https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=39979&item_no=1&page_id=13&block_id=83

田中佑、現代日本語における助数詞への外来語の進出 抽象的概念を表す「-ケース」を例に、文藝言語研究、有、70巻、2016年、pp.81-106

https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=39455&item_no=1&page_id=13&block_id=83

[学会発表](計1件)

田中佑、新聞・鉄道雑誌に見る助数詞「-路線」の成立、第154回関東日本語談話会、2017年10月28日、学習院女子大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

田中 佑 (TANAKA, Yu)

筑波大学・人文社会系・特任研究員

研究者番号：30779674